

## 第27回日本胸部外科学会を省みて

第27回 会長 香 月 秀 雄

第27回胸部外科学会総会は、昭和49年9月25日から27日までの3日間に亘り、会場は東京国立教育会館を中心にして行われた。

この総会の企画をどのように樹てるかについては、数年来の本学会の内容、歴代会長の学会運営に対するそれぞれの特色を参考にしたが、学会そのものの特色として目立つものは、胸部外科領域の3つの大きな柱そのものに変りはないにしても、近年その比重が著しく心臓外科に傾いていること、また、会員の専門分野も、心・大血管を専攻するものの数が著しく多くなっていることである。

会員数の増加に比例して応募する演題数も膨大なものとなり、しかも、その偏りが著しくなっていることも当然である。しかも、研究内容の活発な討議が行われるためには、演題をある程度数の上でも制限せざるを得なくなる。しかし、これは熱心な研究者の意欲をそぐ結果にもなりかねない。これは、私ばかりでなく、ここ数年来歴代の会長の共通した悩みでもあったようである。そして、第一に学会の開催期間の問題であるが、教室、研究室、病院を会員が離れる期間を短くすることは、諸学会研究会の乱立している今の時期では最大3日を限度とするようである。応募演題は出来得る限り採択してこの3日間に入れ、しかも今の学会がもっている欠点を可及的に是正するために、私は、これを口演演題と示説によるものとに分けた。そして、口演7分、討論3分、示説も20分の分野について3～4時間の展示時間を取り、その間に座長をおき、各示説一題の出題者説明を4分、討論を4分とした。

Symposium は、学会の大きな柱になっているが、1) 新生児・乳児（1歳未満）心疾患の手術適応と管理（座長三枝正裕）2) 肺・食道外科領域における高齢者の手術適応（座長佐藤博、仲田裕）3) 胸部・大動脈瘤（座長杉江三郎）の3つを取りあげた。これは、胸部外科の手術適応が年齢の幅で著しく拡大され、心疾患で新生児・乳児に、また、肺・食道疾患では高齢者に手術が行われるようになってきている点を重視した。また、大動脈疾患も動脈瘤の手術症例が増加し、人工血管の進歩と相まって、その手術適応が検討できる段階に至ったことなどの状況によるものである。

なお、本学会のあり方も、ここ数年来研究至上主義の殻を破り、教育上の配慮を加えるべきとする意見が多くみられるようになり、特に大学卒業後なお日の浅い方達に対する胸部外科全般に亘る一般教育の必要性、さらに専門分野における技術的な指導、さらに専攻分野以外の関連領域の教育といったものを考え、これを学会開催中に行うこととした。

この教育の為の企画として、第1にシネ・クリニックを取り上げ、1) 弁置換と弁形成術、2) 肺癌の手術、3) 食道再建を取り上げ、各3～4名の演者が自作の映画を用いて説明し会員の討論に応じた。

第2に、専門教育セミナーを取り上げ、1) 肺・食道外科の術後管理と合併症、2) 体外循環を取り上げた。

第3企画としては、学会につきものになっている機械展示をより有効なものにするため、日常使用する胸部外科領域の器機の数種について、機種の特徴、長所、欠点を出品並びに制作者から説明

させるように機械学会に申し入れたが、快諾をうけ、1) ベースメーカー、2) ベッドサイドハートモニター、3) レスピレーター、4) ネブライザー、5) 吸引器の5機種を取り上げ、それぞれ座長をおき、出品した機械専門家の説明と会員との間に使用法、器機の改善等についての討論を行った。

なお、広い分野に亘る一般演題 127題、示説 151題に分散された会員は、自分の出題分野、討論参加演題等により他の分野の研究内容、その発展の指向等を知ることができないのが実情である。これは、大きな学会の共通した欠点になっているが、学会の最終日をひとつの会場にしぼって、胸部外科領域全般における問題点を特別講演、シンポジウム座長のまとめとして取り上げ、これに招請講演、会長講演を加えたらと考えた。

この日は朝から夕方までこの会場を離れることなしに、そして、前日のシンポジウムの座長のまとめを皮切りにして8つの特別講演と、宮本、中山、木本三先生による肺、食道、心・大血管の外科について日本におけるそれぞれの分野の開拓の歴史と将来の展望についてご講演願った。更に、招請講演として、Prof. Benfield の肺移植、私の会長講演を加えた。会員が胸部外科領域の全般に亘って、最も精力的に活躍している特別講演の演者の話を聞き、更に三つの分野の先達の今日に至る歴史をふりかえりながら、胸部外科学会の全体を聞いたという実感をつかんで貰いたいと願った。

学会としては、相当思い切った変革を求めたつもりであり、私の意図した点について、多数の方から賛同の言葉を寄せられたが、如何せんやはり膨大な演題の数に圧倒されて、十分に意図したものを生かすことができなかった。

演題の中には、秀れた研究が多く含まれていることは確かであるが、他の学会に出題したもの、重複があり、また出題者が多数名前を連ねて、その内容と連名がそぐわないものもある。また演者によっては地方会で充分時間をかけて洗礼を受けた方がよいのではないと思われる者もある。学会として選択すべき演題の内容について更に吟味、検討を加える必要があるように思えた。

また、評議員の数が増え、評議員会は議事を討議、採決する場としての機能を失いつつある。特に、会長、副会長、理事の選考についても、更に検討する必要がある。

学会は各研究者の研究の指向を直接先導するものではないが、野放図もなく演題を羅列する展示場でもない。学会に発表された研究内容のどれ程が、その後論文になり、学術雑誌に発表されているか、出題の連名者の誰がその研究のどの部分を分担しているかといった大変日常的問題も一応取り上げて検討してみる必要があるように考える。

大変堅苦しいことを書いてきたが、恩師の故河合先生が、第3回の胸部外科学会を千葉大学の医学部講堂（その建物は現在取りこわされ、そこに新しい病院が出来つつあるが）で開催された当時に比べると今昔の感に堪えない。また、この学会に先生が病気をしておして出席されたのが、先生の学会出席の最後であった。先生のご冥福を祈って筆をおく。（千葉大学学長）